

小学校 体育 部会

部会長名 大任町立大任小学校 校長 中瀬 博之

実践者名 添田町立添田小学校 教諭 谷山 浩彬

1 研究主題

主体的に自己の課題に向き合う子供を育てる第四学年体育科学学習指導
～スモールステップの場における対話活動の設定を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

現代社会は、知識基盤社会の進展やグローバル化の進行により、社会構造や価値観が急速に変化しており、将来を正確に予測することが困難な時代となっている。このような予測困難な社会を生きていく子供たちには、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力が求められている。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現が掲げられ、子供一人一人が自分の課題に応じて学びを深める「個別最適な学び」と、仲間と関わり合いながら新たな気づきや考えを得る「協働的な学び」を一体的に充実させていくことの重要性が示されている。

中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」においては、これからの時代に求められる資質・能力として、自己調整しながら学ぶ力や、多様な他者と協働する力の育成が重視されており、学校教育全体でその実現を図る必要性が示されている。

一方で、近年は人間関係の希薄化が指摘され、子供同士が目的をもって関わり合い、互いに高め合う経験が十分に得られていない現状が見られる。また、運動習慣の二極化や体力の低下傾向など、子供の体力や運動への意欲に関する課題も報告されている。「令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」では、令和5年度との比較において、小学校の体力合計点が低下していることが示されており、特に小学校女子においては過去最低となっていることが明らかにされている。

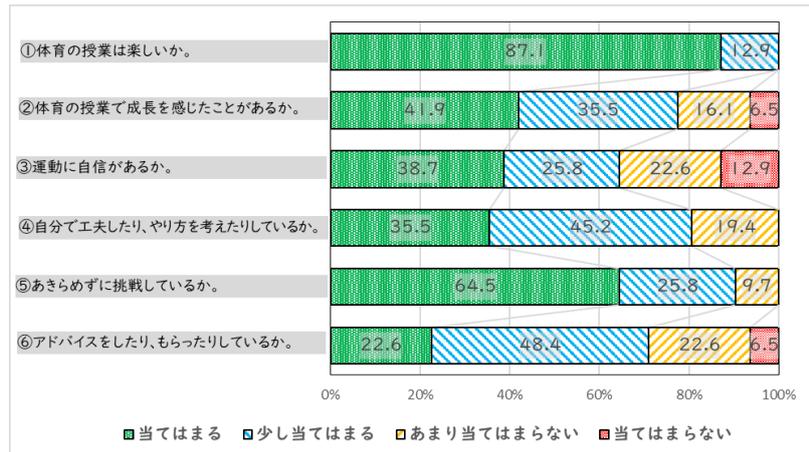
体育科は、運動を通して自己の課題に気づき、試行錯誤しながら技能を高めるとともに、仲間と関わり合い、対話を通して学びを深めることができる教科である。特に、技能や課題に応じた場を設定し、仲間と対話しながら学ぶ活動は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を同時に実現できる学習形態であると考えられる。

以上のことから、主体的に自己の課題に向き合う子供を育てる体育科学学習指導の在り方を究明することは、現代の教育の要請に応えるものであると考え、本主題を設定した。

(2) 児童の実態から

本学級の児童は、普段から運動する児童とそうでない児童で二極化している。1学期の体育科の学習状況は、児童一人一人が自己のペースで学習を進める傾向が強く、交流して助言し合う姿があまり見られなかった。しかし、2学期になり、運動が得意な児童がそうではない児童にアドバイスをしたり、応援したりするなどして寄り添うことで互いに学び合う姿が徐々に見られるようになった。

【資料1】は、体育に関するアンケートの集計結果である。この結果から、「①体育授業は楽しいか」「④『できるようになりたい動き』があるとき、自分で工夫したり、やり方を考えたりしているか」「⑤失敗しても、あきらめずに挑戦しようと思うか」という項目において



【資料1 体育に関するアンケート集計結果(%)】

「当てはまる」「少し当てはまる」と、肯定的に回答した児童が80%以上であることがわかる。しかし、「③体育での運動に自信があるか」「⑥体育で自分や友だちの動きについてアドバイスをしたり、アドバイスをもらったりしているか」という項目では、約70%程度であり、他の項目と比べて肯定的な回答の割合が低いことがわかる。

以上のことから、学級の児童の実態として、体育の学習に対する楽しさや意欲、失敗しても挑戦しようとする前向きな態度は比較的高いものの、自分の運動に対する自信や、動きを基に仲間と関わり合いながら学びを深めていく力については十分であるとは言えない状況にあることがわかる。特に、仲間と動きを見合い、助言をし合う協働的な関わりは一部の児童に限られ、学級全体に広がっているとは言いがたい。こうした児童の実態を踏まえ、主体的に自己の課題に向き合う子供を育てることが必要であると判断し、本研究の主題を設定した。

3 主題の意味

(1) 主題「主体的に自己の課題に向き合う子供」の意味

自己の課題に粘り強く取り組み、自分に合った学習の進め方を自ら調整し、学習を振り返りながら、次の学習に生かしていく子供の姿である。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 体育編」には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において大切な視点として、次のように述べられている。

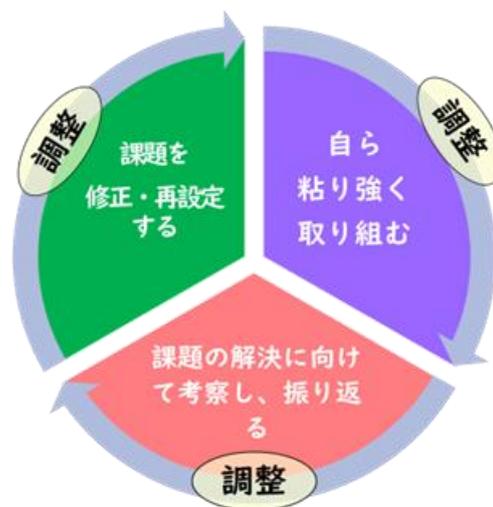
- ・ 運動の楽しさや健康の意義等に気付き、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組み、考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促すこと。

このように、主体的な学びとして、5つの段階（①運動の楽しさに気付く。②運動について興味や関心を高める。③課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組む。④課題の解決に向けて考察し、振り返る。⑤課題を修正・再設定する。）に整理することができる【資料2】。③から⑤においては、課題をもって学習に取り組み、学習を振り返ったことが次の学習につながるということが重要であることが考えられる。

また、児童一人一人の学びに関わる認知の特性が様々であることから課題解決に向けたアプローチも様々あり、児童によって効果の高い学び方はそれぞれ違うことが考えられる。そのため、児童一人一人が自分自身で学習の状況を把握し、自らに合った学習の進め方を考えたり、自主的・自発的な学習を行ったりするなど、主体的に学習を調整することが大切であると考えられる【資料3】。

主体的な学び	
①	運動の楽しさに気付く。
②	運動について興味や関心を高める。
③	課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組む。
④	課題の解決に向けて考察し、振り返る。
⑤	課題を修正・再設定する。

【資料2 「学指導要領解説体育編」に示された主体的な学び】



【資料3 「主体的に自己の課題に向き合う」イメージ】

(2) 副主題「スモールステップの場における対話活動の設定」の意味

① 「スモールステップの場」とは

技能を構成する動きを段階的に捉え、児童一人一人の技能や課題に応じて学習を進めることができる学習の場である。

スモールステップとは、アメリカの心理学者バラス・フレデリック・スキナーによって提唱されたプログラム学習の原理の1つで、学習段階を細分化し、段階的に進める方法である。本研究においては、技能を構成する動きを段階的に捉え、児童一人一人の課題に応じて進める学習方法とする。そして、このような学習方法を可能にするため、技能段階に応じたスモールステップの場を設定した。つまり、「スモールステップの場」とは、技能を構成する動きを段階的に捉え、児童一人一人の技能や課題に応じて学習を進めることができる学習の場である。

② 「対話活動」とは

運動についての課題の解決に向けて、仲間の動きや自分の動き、教材等を手がかりに、動きのポイントや改善点について伝え合い、他者との関わりを通して自己の思考を広げたり深めたりしながら、次の運動に生かしていく学習活動である

対話とは、児童同士が互いの考えを伝え合い、相互理解や課題解決を目的として話し合うことである。日常的で気軽なやりとりを指す「会話」とは異なり、「対話」は他者の考えを手がかりに自己の考えを見直したり深めたりすることに価値が置かれる。このような対話を通した学びは、自己の考えを広げ、深めることを通して、児童がよりよく資質・能力を身に付ける上で重要であるとされている。

そこで本研究における「対話活動」とは、運動についての課題の解決に向けて、仲間の動きや自分の動き、教材等を手がかりに、動きのポイントや改善点について伝え合い、他者との関わりを通して自己の思考を広げたり深めたりしながら、次の運動に生かしていく学習活動とする。

③ 「スモールステップの場における対話活動の設定」とは

児童一人一人の技能や課題に応じて学習を進めることができる場において、仲間の動きや自分の動き、教材等を手がかりに、運動についての課題解決に向けて対話を行い、動きのポイントや改善点について伝え合いながら、思考を広げたり深めたりして次の運動に生かしていく学習活動である。

「①スモールステップの場」とは、児童一人一人の技能や課題に応じて、技能を構成する動きを段階的に捉えながら学習を進めることができる場である。また、「②対話活動」とは、仲間の動きや自分の動き、教材等を手がかりに、運動についての課題の解決に向けて思考を広げたり深めたりし、それを次の運動に生かしていく学習活動である。これらを組み合わせることで、児童は自己の課題に向き合いながら、他者との関わりを通して課題解決を図り、仲間とともに技能を高め合っていく学習が可能になると考える。

4 研究の目標

第四学年体育科学学習指導において、主体的に自己の課題に向き合う子供を育てるために、スモールステップの場における対話活動の設定の有効性について究明する。

5 研究仮説

第四学年体育科学学習指導において、スモールステップの場における対話活動の設定をする上で、以下の2点に着眼した手立てを講じれば、主体的に自己の課題に向き合う子供を育てることができるであろう。

(1) 着眼1：ICTの効果的な活用

本研究の仮説を立証するためには、学習の過程や自己の動きを可視化し、児童が自らの学びを振り返ったり、仲間と共有したりできる環境を整える必要がある。

そこで、ICTを単なる技能指導の補助として用いるのではなく、自己の課題を明確にし、学習の見通しをもって対話的に学びを深めていくための手段として位置付け、次

の3つの観点から効果的な活用を図ることとした【資料4】。

観点	① 学習を見通すための活用	② 理想の動きをつかむための活用	③ 対話を深めるための活用
ねらい	めあてや振り返りなどの学びの足跡をICT上に蓄積し、継続的に振り返ることで、これまでの学習の積み重ねを把握し、次に取り組む課題を見通しをもって設定することができる。	ICTを活用して自分の動きと理想の動きを比較することで、技能を構成する動きのポイントに着目しながら、改善すべきポイントを明確にすることができる。	仲間とICTを手がかりに対話を行うことで、児童は動きのポイントへの理解を深め、他者の視点を取り入れながら課題解決を図ることができる。
具体的活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎時間のめあてや振り返りをICT上に蓄積する。 ・ 「前回の課題」「できるようになったこと」「次に挑戦したいこと」を整理する。 ・ 過去の記録を見返しながら、次時のめあてを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の動きを撮影・再生して確認する。 ・ 手本動画や連続図と自分の試技と比較する。 ・ 踏み切り・着手・着地などに着目する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ課題の児童同士で動画を見合う。 ・ 動きのポイントや改善点を伝え合う。

【資料4 ICTの効果的な活用】

(2) 着眼2：他者や教材との対話をつなぐ教師の働きかけ

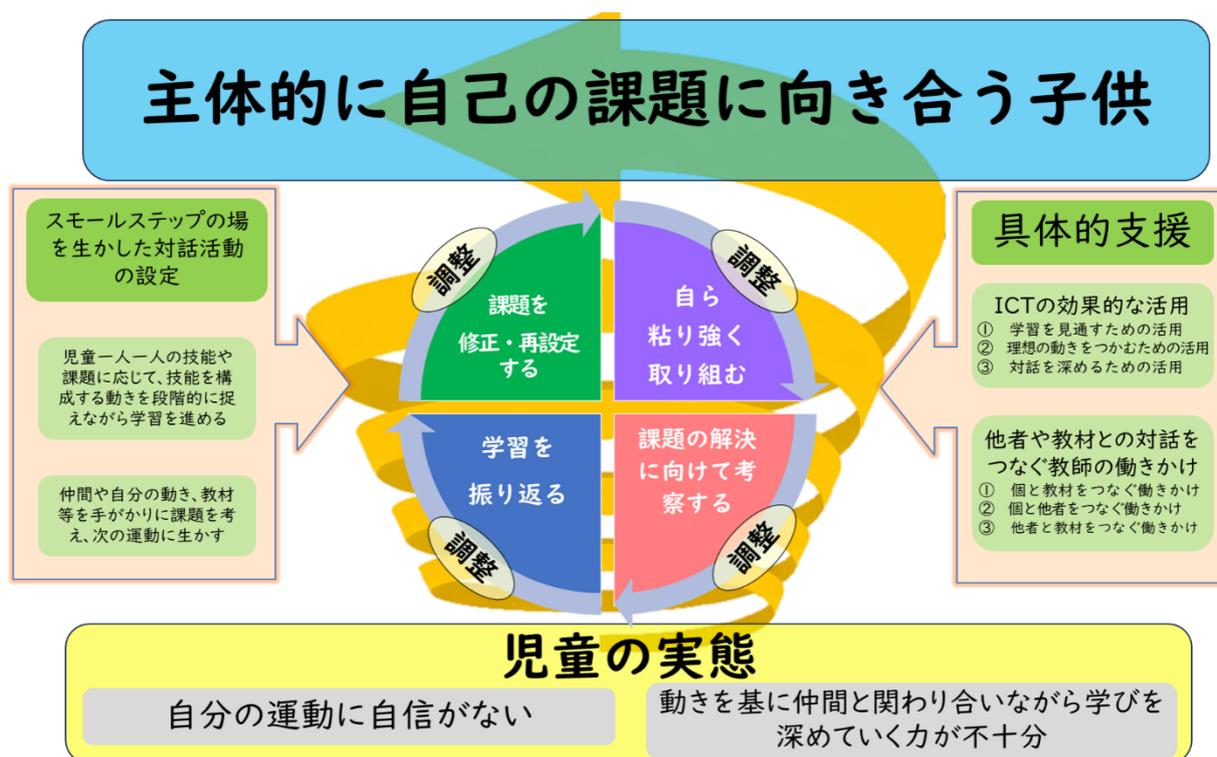
児童同士の対話は、互いの考えや動きを伝え合いながら学びを深める上で有効である一方で、児童の技能や経験の差によっては、対話が十分に成立しなかったり、動きのポイントが曖昧なまま理解されたりする可能性がある。また、対話が行われない場合には、児童が一人で課題解決に向かい、学びが孤立してしまうことも考えられる。

そこで、教師が児童の動きや対話の様子を把握し、着目すべき動きのポイントや考え方などの視点を提示することで、児童同士の対話や教材との対話をつなぎ、学びを深めていく働きかけを行うこととした【資料5】。

観点	① 個と教材をつなぐ働きかけ	② 個と他者をつなぐ働きかけ	③ 他者と教材をつなぐ働きかけ
ねらい	教材を基準に自己の動きを捉え、課題を明確にする	他者の動きや考えを手がかりに、自己の思考を広げ・深める	共通の視点で動きを捉え、対話の質を高める
具体的な働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「手を着く位置は、連続図ではどこになってる？」 ・ 「どうして、今はその動きになったと思う？」 ・ 「次は、お手本のこの部分をまねしてやってみよう」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「自分と友達の動きを比べると、何が違うと思う？」 ・ 「その助言を、自分の言葉で言い直すとどうなる？」 ・ 「どうしてそう思ったのか、理由も聞いてみよう」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「〇〇さんの動きは、連続図のどの動きに近いと思う？」 ・ 「お手本動画と比べて、〇〇さんの良いところはどこかな」 ・ 「〇〇さんは、連続図のどこを見て、そう考えたと思う？」

【資料5 他者や教材との対話をつなぐ教師の働きかけ】

6 研究構想図



7 研究の計画（授業の計画）

(1) 単元「目指せ！跳び箱マスター！（B 器械運動 ウ 跳び箱運動）」

(2) 単元（題材等）の目標及び指導計画

① 運動の特性

ア 一般的特性

跳び箱運動は、技ができるようになってきたり、新しい技に挑戦したりするとき楽しさを味わうことができる運動である。腕支持感覚や逆位感覚など普段感じにくい感覚を養うことができるとともに、身体操作によって自己の動きをコントロールする身体支配能力を高めることができる。また、主運動に類似した易しい感覚運動を取り入れたり、スモールステップで取り組んだりしながら自己の伸びを実感させることや運動のポイントを知り、そのポイントを意識しながら自己の能力に合った練習の場を選択させることを通して、運動の楽しさや喜びに触れることができる内容である。

イ 子どもから見た特性

(ア) 運動の特性に触れる楽しさ体験の状況

跳び箱運動に関するアンケートでは、跳び箱運動へのイメージについて多く挙げられた回答として（複数回答）、「楽しそう」（57.9%）、「難しそう」（42.1%）、「こわそう」（36.8%）などがあった。また、跳び箱運動で心配なことについて（複数回答）多く挙げられた回答として「着地でこけそう」（47.4%）、「高さがこわい」（31.6%）などがあった。このことから、児童の多くは跳び箱運動に対して一定

の意欲をもつ一方で、技の難易度や安全面に不安を抱えていることが明らかになった。学習においては、児童の恐怖心をやわらげて安心して取り組めるように、マットを多く使用したり、跳び箱の高さを無理のない範囲で調整したりして、安全な環境を整えることが大切である。また、スモールステップを取り入れ、技に段階的に挑戦できるよう工夫を重ねながら指導を進めていくことが求められる。

(イ) 技術の習得状況

跳び箱運動のレディネスを見ると、学級の全員が「またぎ乗り」や「踏み越し跳び」ができる一方で、40%の児童が「勢いのあるまたぎ下り」を十分に行えていなかった。「またぎ下り」で下りる際に、肩の位置を手の位置より前に移動させることで生じる体重移動に課題がある児童が多いことが考えられる。また、「開脚跳び」は47%の児童ができていなかった【資料6】。これは、腕支持による体重移動に課題があることに加え、勢いのある踏み切りから着手に至るまでの動きに恐怖心を抱いていることが要因として考えられる。

以上のことから、「台上前転」などの技においても、恐怖心を感じる児童が多いことが予想され、より安全面に配慮した指導を心がける必要がある。

技	またぎ乗り	踏み越し跳び	勢いのある またぎ下り	開脚跳び
習得率	100%	100%	40%	47%

【資料6 跳び箱運動のレディネス】

(ウ) 学び方に関する学習経験の状況

本学級の児童は、タブレットを用いてめあての設定を行い、1時間の学習を振り返る活動に取り組んでいる。そして、タブレットに自分の記録や課題の達成具合を確認できるようにしている。しかし、自己の課題を正しく把握したり、課題に合った練習方法を自分で選んだりする児童はあまり多くない。

また、準備や片付けなどは全員で協力して行うことができる。しかしながら、活動中の友だちに対する声かけやアドバイスについては、数名の児童ができていないが、自分の活動に一生懸命になり協力して活動できていない児童が多い。

(3) 単元の考え方

本単元は、跳び箱運動において、助走・踏み切り・着手・着地などの基本動作を段階的に身に付けながら、友だちと互いに見合い、取り組むことで、技に挑戦したり、できるようになったりする楽しさや喜びを感じられる運動である。また、安全に配慮しつつ個々の技能を高めることで、腕の突き放しから体を投げ出して切り返す動きや、着手した位置よりも腰を高く上げて大きく回転する動きを身に付けることができる。これらの動きは、高学年の跳び箱運動における「かかえこみ跳び」、「伸膝台上前転」や「頭はね跳び」の基礎となるため、中学年の児童にとっては、大変価値があり、意義深い。

(4) 仮説検証の方途

- ① 対象 添田町立添田小学校4年2組 男子17名女子14名 計31名
- ② 期間 令和7年11月17日(月)～12月15日(月)
- ③ 内容と方法

支援	内容(具体的支援を含む場の設定の有効性)	分析方法
場の設定	<p>自己の課題を明確にし、学習の見通しをもって対話的に学びを深めていくための効果的なICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習を見通すための活用 ② 理想の動きをつかむための活用 ③ 対話を深めるための活用 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習中の様相観察 ○ 学習カードの記述 ○ 学習後の振り返り(自己評価) ○ 単元終了後のアンケート
対話活動の設定	<p>教師が児童の動きや対話の様子を把握し、着目すべき動きのポイントや考え方などの視点を提示することで、学びを深めていく働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 個と教材をつなぐ働きかけ ② 個と他者をつなぐ働きかけ ③ 他者と教材をつなぐ働きかけ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習中の様相観察とその分析 ○ 学習後の振り返り(自己評価) ○ 単元終了後のアンケート

(5) 単元の目標

単元	目指せ! 跳び箱マスター!	総時数	8 時間	時期	11月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ (知識及び技能) 開脚跳びなどの切り返し系の技や台上前転などの回転系の技をすることができる。 ○ (思考力、判断力、表現力等) 課題を見つけ、課題解決の活動を工夫し方法を友だちに伝えることができる。 ○ (学びに向かう力、人間性等) きまりを守り仲良く運動したり、安全に気を付けたりすることができる。 				
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)	
1	1	<p>【目標】 学習の進め方や跳び箱運動につながる運動感覚を身に付けることができる。</p> <p>【評価】 ・ 跳び箱運動の行い方について、言ったり書いたりしている。(知識・技能) ・ 安全に気を付け、跳び箱などの用具の安全を確かめて練習しようとしている。(主学態)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 学習の見通しをもつ <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元の目標と学習の進め方を知る。 ・ 学習のきまりを知る。 ・ 用具の準備の仕方を知る。 ・ 用具の使い方を知る。 2 感覚づくりの運動をする。 主運動につながる運動の行い方について知る。 3 開脚跳びの動き方やポイントを知り、自己の課題を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 技のイメージを持たせたり、学習意欲を高めたりするために動画を視聴する。 ○ 安全に活動するためのきまりを掲示物などで示し、確認させる。 	

			4 片付け・振り返りをする。	
2	2	<p>【目標】 自分の課題を見つけて、自分に合った場で練習することができる。</p> <p>【評価】 学習カードや資料などをもとに、自分の力に合った技を選び、その技に応じた練習の場や練習方法を選んでいる。(思・判・表)</p>	<p>1 用具の準備・感覚づくりの運動・めあてづくりをする。</p> <p>2 開脚跳び（かかえ込み跳び）を試す。</p> <p>3 試した動きから自己の課題を見つけたり、自分や友達の動きを見て、出来栄を伝えたりする。</p>	<p>○ 課題に合った場を選ぶことができるようにするために、動きの出来栄について具体的に言語化させる。</p> <p>○ 具体的に動きを捉えるために、ICTや掲示物による「動きのポイント」立ち返らせる。</p>
	3	<p>【目標】 課題解決のために得たコツなどを友達と伝え合うことができる。</p> <p>【評価】 ・ 助走から両足で踏み切り、足を左右に開いて着手し、跳び越えて着地することができる。(知・技) ・ わかったことや動きの出来栄を友達に伝えている。(思・判・表)</p>	<p>4 動きのポイント（教師の助言）やコツ（児童が獲得した感覚のヒント）を共有する。</p> <p>5 自分に合った場で練習する。</p> <p>6 片付け・振り返りをする。</p>	<p>○ 具体的な助言をしている児童を価値づける。</p>
	4	<p>【目標】 自分の課題を見つけて、自分に合った場で練習することができる。</p> <p>【評価】 学習カードや資料などをもとに、自分の力に合った技を選び、その技に応じた練習の場や練習方法を選んでいる。(思・判・表)</p>	<p>1 用具の準備・感覚づくりの運動・めあてづくりをする。</p> <p>2 台上前転（伸膝台上前転）を試す。</p> <p>3 試した動きから自己の課題を見つけたり、自分や友達の動きを見て、出来栄を伝えたりする。</p>	<p>○ 課題に合った場を選ぶことができるようにするために、動きの出来栄について具体的に言語化させる。</p> <p>○ 具体的に動きを捉えるために、ICTや掲示物による</p>

	5	<p>【目標】 課題解決のために得たコツなどを友達と伝え合うことができる。</p> <p>【評価】 ・ 助走から両足で踏み切り、腰の位置を高く保って着手し、前方に回転して着地することができる。(知・技) ・ わかったことや動きの出来栄を友達に伝えている。(思・判・表)</p>	<p>4 動きのポイント（教師の助言）やコツ（児童が獲得した感覚のヒント）を共有する。</p> <p>5 自分に合った場で練習する。</p> <p>6 片付け・振り返りをする。</p>	<p>「動きのポイント」立ち返らせる。</p> <p>○ 具体的な助言をしている児童を価値づける。</p>
3	6	<p>【目標】 発表する技を選び、自分に合った練習を選んで技能を高めることができる。</p> <p>【評価】 技の動き方やポイントを知り、自分の力にあった課題を選んでいる。(思・判・表)</p>	<p>1 用具の準備・感覚づくりの運動・めあてづくりをする。</p> <p>2 自己の課題に合った技を選んで練習する。(練習①)</p> <p>3 動きのポイント（教師の助言）やコツ（児童が獲得した感覚のヒント）を共有する。</p>	<p>○ 明確な目標をもって技を選べるように、選ぶ技の視点（「さらにきれいに跳べる技」・「もう少しで跳べるようになる技」）を示す。</p> <p>○ これまでに学んだ動きのポイントやコツを基に、自己の課題に合った練習方法を選択できるように声をかける。</p>
	7	<p>【目標】 選んだ技をよりよくできるように、進んで練習に取り組むことができる。</p> <p>【評価】 技ができるようになるために、練習に進んで取り組もうとしている。(主学態)</p>	<p>4 自己の課題に合った技を選んで練習する。(練習②)</p> <p>5 片付け・振り返りをする。</p>	
4	8	<p>【目標】 自分の課題解決に向けて取り組んだ成果を見せ合っ、互いのよさを伝え合う。</p> <p>【評価】 ・ 跳び箱運動の行い方について、言ったり書いたりしている。(知・技) ・ きまりを守り、協力して活動しようとしている。(主学態)</p>	<p>1 用具の準備・感覚づくりの運動・めあてづくりをする。</p> <p>2 発表する技を練習する。</p> <p>3 マスター発表会をする。</p> <p>4 全体でよさを伝え合う。</p> <p>5 学習のまとめをする。</p> <p>6 片付けをする。</p>	<p>○ 発表会を円滑に進めるために、「発表会の仕方」を掲示する。</p> <p>○ 互いのよさを見つけられるようにするために、技や課題ごとにグループ編成をして、発表会を行う。</p> <p>○ 今後の学習に意欲を持たせるために、全体で感想を交流させる。</p>

(6) 本時における展開

① 本時の主眼

回転系の技のポイントを意識して互いに見合い、教え合いながら練習することを通して、助走から両足で踏み切り、腰の位置を高く保って着手し、前方に回転して着地することができるようにする。

	学習活動	指導上の留意点 ・ ★評価規準（評価方法）
導入 5分	<p>1 用具の準備をする 安全に気を付けて協力して準備をする。</p> <p>2 感覚づくりの運動をする</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">アニマルサーキット</p> <p>アザラシ（腕支持の感覚）→ウサギ（突き返しの感覚）→カエル（腰上げの感覚）→ダンゴムシ（前転）</p> </div> <p>3 めあての確認をする</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>クラスのめあて コツをつかんだり広めたりして技をできるようにしよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 技のポイントを確認する。 ・ 自分の課題に合った個人のめあてを確認する。 ・ めあてを共有する。 	<p>○ 用具の持ち方や配置を掲示する。</p> <p>○ 感覚づくりの運動の前に首や手首などをストレッチさせる。</p> <p>○ 1つ1つの動きが、跳び箱運動のどの動きにつながるか意識させるために声かけを行う。</p> <p>○ 前時の学習カード等を見て自分の課題を明らかにさせる。</p>
展開 ① 15分	<p>4 台上前転（発展：伸膝台上前転）を試す。</p> <p>(1) 動きのポイントを確認する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">台上前転のポイント</p></div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 力強い踏切 ・ 跳び箱の手前で着手 ・ 腰を高く上げて丸くなる ・ 前を見て両足で着地 <p style="text-align: right;">等</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">伸膝台上前転のポイント</p></div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 力強い踏切 ・ 跳び箱の手前で着手 ・ 腰を高く上げて膝を伸ばす ・ 前を見て膝を柔らかく曲げて着地 <p style="text-align: right;">等</p> <p>(2) 場を選んで試す。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 重ねたマットの場 ② 連結の場 ③ ソフト跳び箱の場 ④ 段々の場 ⑤ 補助で試す場 ⑥ 試しの場 	<p>○ タブレットで連続図や動画、掲示物にあるコツ等を用いて確認させる。</p> <p>○ 「手前で着手」や「速すぎない助走」など、怪我に直結するポイントについては、全体で必ず確認させる。</p> <p>○ わかったことや動きの出来映えを友だちに伝えている姿を価値づける。</p> <p>○ 全体が見える場で試技の補助を行う。</p>

<p>展開② 20分</p>	<p>5 動きのポイント（教師の助言）やコツ（児童が獲得した感覚のヒント）を共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ポイントやコツを全体で共有する。 (例1) 「両足でドンと音が鳴るくらい強く踏み切る」 (例2) 「手と手の間に頭をグッと入れる」 <p>6 自分に合った場で練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 共有した意見をもとに、再度場を選んで練習する。 「今日の成果」を撮影し記録する。 	<p>○ わかったことや動きの出来映えを友だちに伝えている姿を価値づける。</p> <p>★ 助走から両足で踏み切り、腰の位置を高く保って着手し、前方に回転して着地することができる(観察・カード)。</p>
<p>終末 5分</p>	<p>7 片付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員で協力して片付ける。 <p>8 学習を振り返る</p> <p>次時（発表する技を選び、練習する）への見通しをもつ。</p>	<p>○ 予め次時のめあてを知らせることで、活動の見通しをもたせる。</p>

8 指導の実際

(1) 「着眼1：ICTの効果的な活用」について

【資料7-1】は、スモールステップの場において、児童がICTを活用して自己の動きを振り返っている様子である。児童は、自身の技能段階に応じた練習の場で試技を撮影・再生し、手本動画や連続図と比較しながら、踏み切りや着手の位置など、技能を構成する動きのポイントに着目して確認している様子が多く見られた。



試技を撮影する様子

撮影した試技を基に他者と対話をする様子

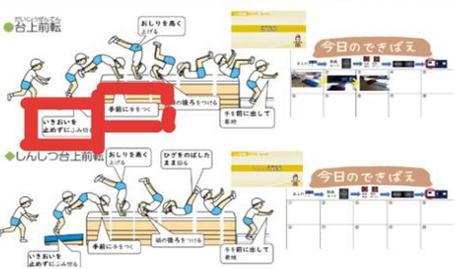
手本動画や連続図を見てポイントを確認する様子

回転系の自分の課題を見つけよう。

自分のめあて
きょうは、勢いを止めずおしりを高く上げるのところまでいこう

今日の学習のふりかえり
おしりを上げて立とうとしたけど着地がダメだったから次は、立てる練習をします。

●台上前転



●しんしつ台上前転



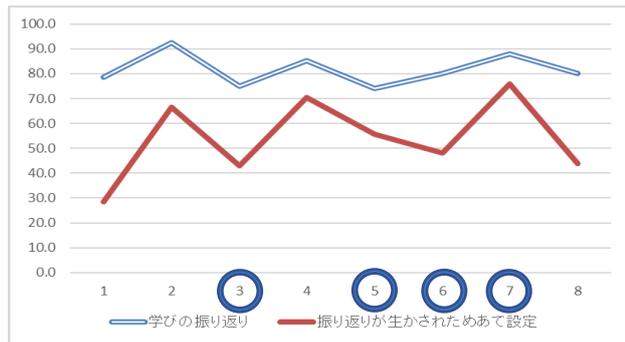
今日のできばえ



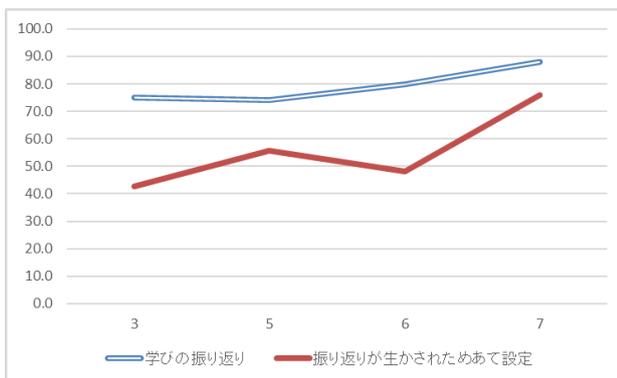
学びが蓄積されている学習カード

【資料7-1 「ICTを活用する児童」と「学びが蓄積されている学習カード」】

【資料7-2】は、「学習の進捗」と「学習を見通すためのICT活用」をしていた児童の割合を折れ線グラフで示したものである。青二重線は、「前回の課題」・「できるようになったこと」・「次に挑戦したいこと」などを、振り返ることができていた児童の割合（「学びの振り返り」）である。また、赤の線は、振り返りを生かして次時のめあてに生かしていた児童の割合（「振り返りが生かされたためあて設定」）である。「学びの振り返り」を行っていた児童は、各時間概ね80%に達しており、安定して高い割合を示していることがわかる。一方、「振り返りが生かされたためあて設定」では、学習時によって割合にばらつきがみられた。これは、取り組む技が変わることに伴って、スモールステップの場が変更されたことにより、前時の振り返りが生かされにくい学習があるためであると考えられた。そのため、【資料7-3】では、前時の課題が生かされる構成となっていた第3時・第5時・第6時・第7時の学習を抽出した。第3時の学習では、「振り返りが生かされたためあて設定」を行っていた児童は、42.9%であったが、第7時には、76.0%にまで増加している。学習が進むにつれて、振り返りを生かして次時のめあてを設定する児童が増加傾向にあることが明らかとなった。

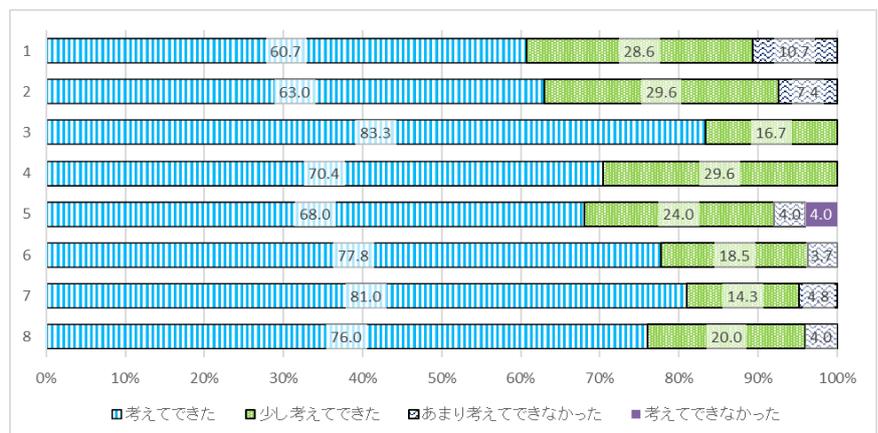


【資料7-2 「学習の進捗」と「学習を見通すためのICT活用」の推移】



【資料7-3 「学習の進捗（3時・5時・6時・7時）」と「学習を見通すためのICT活用」の推移】

【資料7-4】は、学習の終末場面に、学習の振り返り活動を行ったときの児童アンケート「自分の苦手や得意を考えて、技の練習ができましたか。」の質問に対する結果である。全ての学習において「考えてできた」・「少し考えてできた」と肯定的に回答した児童が、概ね90%に達していた。



【資料7-4 学習終了後のアンケート(%) 「自分の苦手や得意を考えて技の練習ができましたか」】

これらのことから、主体的に自己の課題に向き合うために、スモールステップの場における対話活動において、効果的にICTを活用することは概ね有効であったと考える。

このような結果が得られた要因として、スモールステップの場を設定し、児童一人一人の技能段階や課題に応じた学習を可能にしたことが挙げられる。技能を構成する動きを段階的に捉えた場で学習を進めたことで、児童は「自分はどの動きに課題があるのか」「次に何を意識して取り組めばよいのか」を具体的に捉えやすくなったと考えられる。

また、ICTを活用して自己の動きを撮影・再生し、手本動画や連続図と比較する活動を取り入れたことにより、踏み切りや着手の位置など、技能を構成する動きのポイントに着目した振り返りが多く見られた。これにより、児童は感覚的な理解にとどまらず、理想の動きを基準に自己の課題を具体的に認識することができたと考えられる。

一方で、「振り返りを生かしたためあて設定」の割合には学習時によってばらつきがみられた。これは、取り組む技の変更に伴いスモールステップの場が変わったことで、前時の課題を次時に十分生かすににくい学習があったためであると考えられる。このことから、今後は技の移行時においても課題のつながりを意識させる教師の働きかけや、振り返りの視点をより明確にする工夫が必要である。また、ICTを活用することが目的となっていて、次時に生かすことができていなかった児童が少なからずみられたため、今後は、ICTを「見るための手段」ととどめるのではなく、「次に何を意識して取り組むか」を明確にするための手段として児童に意識付けを行い、振り返りとめあて設定、次の試技へとつながる学習の流れをより意識的に構成していく必要があると考える。

(2) 着眼2：「他者や教材との対話をつなぐ教師の働きかけ」について

【資料7-5-1】は、児童が教材（手本動画・連続図）を手掛かりに自己の課題を捉えようとしている学習の振り返りである。学級では、多くの児童が自分の試技と手本を見比べながら動きを確かめていたが、見ても違いをうまく言語化できない児童も見られた。

その一人であるN児も、台上前転の試技を何度も見直していたものの、どこを改善すればよいのかを捉えきれずにいた。そこで教師は、【資料7-5-2】のように、N児の試技と手本を並べて提示し、「腰の角度はどうなっているかな」「どちらが回りやすそうかな」と問い返ししながら対話を行った。

この問い返しによって、N児は自分の動きと教材とを比較しながら考え始め、手本との違いに気付いて自己の課題を明確にすることができていた。

【資料7-6】は、「かかえ込み跳び」の学習において、児童同士が助言をやり取りしている場面である。児童らは、それぞれスモールステップの場で、同じ課題をもつ児童同士で技に取り組んでいた。

自分のめあて
僕の台上前転は角度が110度で手本は、95度くらいだから95度くらいにしたい。

今日の学習の振り返り
110度が出来てないから今度の体育はそれをマスターしたい。

【資料7-5-1 個と教材がつながった学習の振り返り】



ひざをむねを近づけて
丸くなりましょう！

【資料7-5-2 個と教材をつなぐ働きかけ】

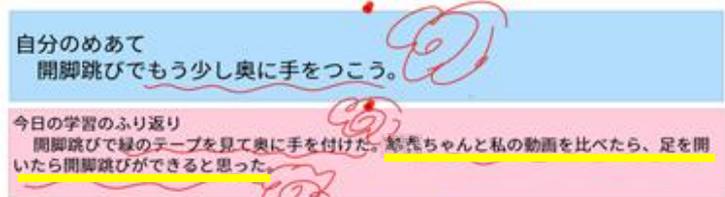


【資料7-6 個と他者がつながる様子】

その中で、U 児は何度もゴムを踏んでしまい、思うように跳ぶことができずにいた。そこで教師は、「M くんはさっきできるようになっていたよ。どうやっていたか聞いてみよう」と声をかけ、他者との対話につなげた。U 児は M 児の助言を聞いた後、教師から「今のアドバイスを自分の言葉で言ってみよう」と問い返されることで、聞いた内容を自分の課題として捉え直していった。

その結果、U 児は「ひざをむねに近づけたい」と自らの課題を言語化することができ、次の試技につなげていた。

【資料 7-7】は、教師の問い返しや仲間とのやり取りを通して、児童が他者の動きと教材（手本動画・連続図）とを結び付けながら、自分の課題を捉えている様子が表れた学習の振り返りである。



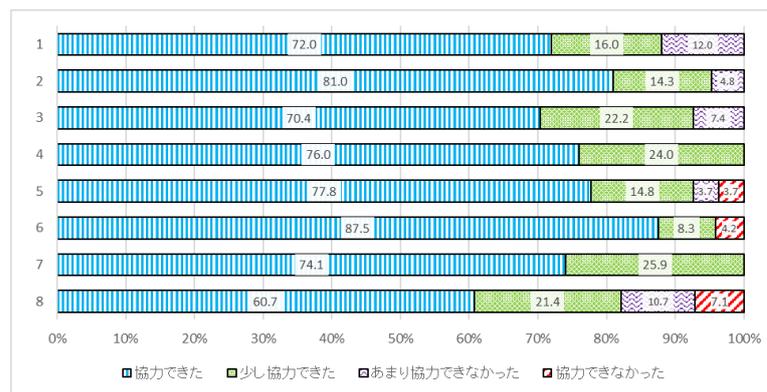
【資料 7-7 他者と教材がつながった学習の振り返り】

当該児童 I 児は、「Y ちゃんと私の動画を比べたら、足を開いたら開脚跳びができると思った」と記述しており、他者の動き（Y 児）と自分の動きとを動画を手掛かりに比較しながら、次に改善すべき点を見いだしていることがわかる。

また、学級の技の習熟度に応じて、全体交流の時間を設けた。全体交流では、あえて教師が失敗の試技を示し、その後に模範となる試技を児童が行うことで、成功と失敗の違いに目を向けさせた。さらに、「〇〇さんは、どのポイントがうまくいっていたかな」と発問することで、教材（手本の動き）と模範となる児童の動きとを結び付ける働きかけを行った。

その後の個別練習では、児童同士で他者の動きと教材を結び付けながら対話する姿が少しずつ見られるようになったが、十分に意識化されない場面もあった。そこで教師は、必要に応じて再度全体交流を行い、視点を共有することで、児童が教材と他者をつなげて考えることを意図的に支えていった。

【資料 7-8】は、学習の終末場面に、学習の振り返り活動を行ったときの児童アンケート「友だちと協力して学習することができましたか。」の質問に対する結果である。全ての学習において「協力できた」・「少し協力できた」と肯定的に回答した児童が、概ね 80% に達していた。



【資料 7-8 学習終了後のアンケート(%) 「友達と協力して学習できたか」】

これらのことから、主体的に自己の課題に向き合うために、スモールステップの場を生かした対話活動において、対話活動を設定したことは、一部有効であったと考える。

このような結果が得られた要因として、同じ課題に取り組む児童が同じ場に集まることで、互いの動きを見たり、声をかけ合ったりしやすい学習環境になっていたことが

考えられる。また、教師が手本動画や友達の動きを取り上げて問い返すことで、児童が「何に着目して話し合えばよいのか」を意識しながら対話できていたことも、協力して学ぶ姿につながっていたのではないかと考えられる。

しかし、すべての児童が常に他者や教材をつなげながら対話できていたわけではなく、声をかけられるのを待ったり、友達の動きを十分に見取れなかったりする場面も多く見られた。スモールステップの場を設定するだけでは、対話の質や深まりには差が生じることがあり、教師がどのタイミングで、どのような働きかけを行うかが、より意識的に工夫する必要がある。

9 成果と今後の課題

- ICTの効果的な活用を位置付けたスモールステップの場の設定を行ったことで、自己の課題を明確にし、学習の見通しをもって学びを深めていく児童が多く見られた。
- 他者や教材との対話をつなぐ教師の働きかけを位置付けた対話活動の設定を行ったことで、明確な視点をもって協力して活動する児童が一部見られた。
- ICTを「自己の課題を明確にし、学習の見通しをもって対話的に学びを深めていくための手段」として位置付けていたが、児童にその意図が十分に共有されておらず、使うこと自体が目的になってしまう場面も見られた。今後は、ICTの活用と振り返りやめあて設定をより結び付け、次の試技へとつながる学習の流れをいっそう意識的に構成していく必要がある。
- すべての児童が他者や教材を結び付けて対話できていたわけではなく、関わりが浅くなる場面も見られた。スモールステップの場を生かすためには、教師が働きかけのタイミングや内容をより意識的に工夫する必要がある。

◎ 参考文献

- 「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 体育編」
2017年 文部科学省
- 「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」
2021年 文部科学省
- 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」
2021年 中央教育審議会
- 「人間関係の希薄さに関する研究のレビュー：社会的孤立，孤独，SNSに注目して」
2020年 国立社会保障・人口問題研究所
- 「令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」
2025年 スポーツ庁
- 『『みるみる』個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のためのサポートマガジン」
2025年 文部科学省
- 「写真と動画で丸わかり！ 跳び箱運動のすべて」
2022年 三好真史 東洋館出版社